（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　谷口 雄太

本論文は、室町幕府が権力を後退させていく中においても、なお将軍や足利一門に権威が認められていたことに注目し、中世後期の武士社会において足利氏や足利一門を尊貴な存在とする秩序意識・序列意識が広く共有されていたことを明らかにしようとするものである。さらに、権力が分散・多極化した戦国期においても一定の政治秩序が維持されていたとして、日本中世社会に内在する求心的側面に光を当てることを試みる。

第Ⅰ部「足利氏御一家論」では、政治的役割に乏しいことから従来の研究では等閑視されてきた吉良氏・石橋氏・渋川氏をとりあげる。まず、それぞれについて個別研究（第一～四章）を進め、いずれも儀礼的には上位に位置づけられていたこと、戦国期に地方に下向しても、周辺領主から尊貴な存在と認められていたことを明らかにする。続いて第五章では、彼らが足利一門のなかでも「御一家」として特別視されていたことを指摘し、その背景・役割を探求する。すなわち、いずれも鎌倉期には惣領家（のちの将軍家）に匹敵する有力な庶子家であり、15 世紀半ばには御一家として位置づけられるようになったこと、その間、いずれも政治的には地位を低下させるものの、かえって政治的な変動に左右されない権威として御一家の儀礼的な地位が高まったことを明らかにする。さらに御一家には、将軍家の断絶に備えた代替的な役割が求められていた可能性に言及する。

第Ⅱ部「足利的秩序論」では、中世後期の武士社会における序列意識を俯瞰し、足利将軍家を中心にした足利一門が他氏に優越していたことを明らかにし、それを「足利的秩序」と概念化し、室町幕府の政治支配を支えていたとする。第六章では従来曖昧であった足利一門の範囲を確定し、第七章とあわせて、足利的秩序が中央・地方いずれにおいても広く共有されていた様相を明らかにする。第八章では足利的秩序の形成過程に注目し、14 世紀末を機に整備された室町幕府儀礼が重要な役割を果たしたことを指摘する。また、戦国期に室町幕府は政治的実力者を足利一門に取り込むことによって、政治権力の活性化を図ったが、それはかえって足利的秩序の自壊を招いたとして、政治秩序の側面から政治史の展望を試みる。

以上のように、御一家の存在や役割を明らかにするなど権威的側面に注目し、足利一門の研究段階を引き上げ、また当該期における儀礼の存在感を浮かび上がらせた点が本論文の成果として特筆される。さらに中世後期武家社会における固有の序列意識「足利的秩序」を見出し、その枠組みの中で室町幕府の消長を展望した点も、政治史の新たな視角を提示するものとして注目される。論述に重複が散見するなど論文としての構成にやや問題を残すこと、権力と権威の関係など、なお取り組むべき課題が残されてはいるが、総じて本論文が独創的な成果であることは揺るがない。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断した。